美しさを知る子どもと知らない子ども

初瀬基樹

今年度に入り、週に1回、芸術家のかた(版画家の前田由佳理さん）にアトリエリスタとして来園していただき、「アートなひととき」という時間を設けていますが、わが園でこのような活動を取り入れたきっかけは、イタリアのレッジョ・エミリアという地域で行なわれている保育にも少なからず影響を受けているからです。

先日、オンラインの講座で、実際にレッジョ・エミリアでアトリエリスタとして働いた経験をお持ちの方のお話しを聞く機会がありました。そのなかで「美しさを知る子どもと知らない子ども」の話がとても印象に残りました。

「美しさを知る子ども」は、美しくない環境を与えられたときに、それを自ら変えたり、違う環境を選んだりして能動的に生きることができる。反対に「美しさを知らない子ども」は、どれだけ劣悪な環境を与えられたとしても、それを受け入れてしまう。つまり、子どもたちには能動的に生きてほしいから「美しさ」を知ってほしいのだと。

もともとレッジョ・エミリアというのは、第二次世界大戦中、レジスタンスの拠点でした。悲惨な過去を反省し、「絶対に戦争を起こさない人間をつくる」という平和への強い決意のもと、戦後、ナチスドイツが残していった戦車等をスクラップにして売り、そのお金でレンガを買って自分たちで学校を作ったりしたとのことです。そして、市民はそれまでの「すでにある概念を日常的に伝える保守的な」教育ではなく、「新たな思想や文化を考えていける」教育を望んだとのことです。「知識とは与えられるものではなく主体的に構築していくもの」であり、学校は、「日常生活のなかで知識を築き上げる場所」であり、環境は「第3の先生」（通常27人の子どもに2人の先生がついているため）とも呼ばれ、とても重要視されているとのこと。

そんな背景があるからこそ、レッジョ・エミリアでは、各園にアトリエが設置され、アトリエリスタも配置されているのでしょう。アトリエリスタとは「言葉ではないことばで、子どもたちの学びを支える人」とのこと。

この講座ではないのですが、そうしたレッジョの保育の根本には、小さな時から様々な表現や違いが「あるのが当たり前」で、既成の価値観を押し付けない、そして、どんどん自由な表現が生まれてくるようにいろんな手法で促す。そうしてうまれた多様な表現を、受け取る側も優劣をつけるのではなく、いろんな表現の違いを楽しむ。また、そうした違いがたくさんあることを「豊か」と感じる。そこに本当の「平和」があると考えられているそうです。このように、レッジョの保育の根底には「平和」を追求する思想が強く流れているのです。

「美しさ」つながりでもう一つ、『センス・オブ・ワンダー』という本のなかで、作者のレイチェル・カーソンが次のように述べています。

「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけだした知識は、しっかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。

（レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』新潮文庫　より）

まだまだ日本の学校においては、美術や音楽などの芸術は軽視され、学力テストで点数をつけることができるような答えがわかっているものを教える(伝える）教育が重視されているように感じています。だから、子どもたち（すでに大人になった人たちも）は、社会環境が悪化していても受け入れてしまって、受け身の人生を歩んでしまうことが多いのではないかと・・・。今の子どもたちが、もっと自分たちの社会をより良いものにしていきたいと能動的に生きられるように、今のうちから「美しさを知る」子どもたちを育てていきたいと改めて思いを強くしました。